
僕、生きて帰ったら翠屋を継ぐんだ……

綺雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕、生きて帰ったら翠屋を継ぐんだ……

【Nコード】

N7479Y

【作者名】

綺雨

【あらすじ】

高町家の次男として生を受けた主人公。妙な前世の記憶を持ちつつも平穩に生きる彼の前に妙なモノが現れる。未来から来たという『彼女』だが、この世界は『彼女』の知る世界とはかなり違うよう……

基本ほのぼの、たまにシリアスっぽい、きつとコメディなお話。

プロローグ（前書き）

初投稿。更新は不定期です。

プロローグ

やはり私のマスターはあの人だけ、か。

最愛のマスターとの別れから数十年。宙空に浮かびながら『彼女は独りごちた。

幾つもの研究所を転々とし、幾人もの人間が『彼女』を使おうとした。

けれど。

機能ばかりが増えていき、進化し続けた『彼女』の前に、しかし担い手は一向に現れなかった。

その性能の高さゆえに眠りにつくことすら許されず、ただ待ち続けるしかなかった『彼女』。

だけどそれももう終わり。

感情すら持った『彼女』は歓喜に打ち震えていた。

あの役立たず共も今回はかりは褒めてやってもいいかもしれない。時間遡行。

本来それは不可能だとされてきた。

しかし先日その概念が覆されたのだ。

いつてもたどり着く先は並行世界であり、完全な時間遡行が不可能なことには変わらない。

おまけに開けられる『穴』はせいぜいが拳大ほど。時間旅行など夢のまた夢。

だが『彼女』にはそれで十分。
ブウン！！

システムをハッキングし、実験装置を起動させる。

軽い次元震と共に開き始める『穴』。

研究員たちが気づいて慌てますが、もう遅い。

『私はマスターに会いにいきます。御機嫌よう、間抜けさんたち』

上機嫌な声を最後に『彼女』は姿を消した。

『彼女』の名はレイジングハート。かつてのエースオブエースの愛機。

それは史上初のデバイスの次元犯罪者（？）誕生の瞬間だった。

一章

「はい、じゃあここまでにしませう」

その言葉に合わせたかのように鐘が鳴る。

四時限目終了の合図。

昼休みだ。

途端、学校全体がざわめきだす。

いい加減慣れてもよさそうなのに。

どうにも懐かしく感じるその気配に、知らず顔を緩ませた。

私立聖祥大附属小学校。それがこの学校の名前。

地元では有名なお金持ち学校である。

ちなみにウチはただの喫茶店。お父さんたち超頑張った。

通い始めて二年以上経つが、本当に小学校か？ と言いたくなる設備にはいまだに驚かされる。

不満があるとしたら給食がないことと、制服のデザイン。

水兵服そのものなのだ。いっそ帽子も付けてくれないか、ってくらい。

女子の制服は凝ってるくせに。

愚痴を言っても仕方がないし、結構な学費が掛かってるからやる気もないけど。

それに。

「礼也！ 行くわよ！」

ここには親友もいる。

振り向いた先には僕の今生初めての友達の一入。

長く伸ばした髪は金系のように煌き、白人系の色素の薄い肌は滑らかでまるで白磁。幼いながらも愛らしく整った顔には、エメラルドを嵌め込んだが如き瞳が勝気な光を放っている。

我ながら身贔屓の入りまくった描写だと思うが、それを抜きにし

ても類稀な美少女だ。

アリサ・バニングス。

アメリカ人の実業家を父に持つ、正真正銘のお嬢さま。

中流以上の家庭の子女が揃うこの学校でもぶっちぎりのお金持ちなのだ。

どれくらいかって言うのと専属の執事が付くレベル。最初知った時は驚きを通り越して呆れてしまった。

そんな感じで育ちにはとんでもなく違いがあるものの、なんだかんだで二年付き合いが続いている。

「今日も屋上？」

檸檬色の弁当包みを取り出し聞いてみる。答えは分かっているけど。

「もちろん。よく晴れてるし、席とられないように急ぐわよ」

「はいはい」

この子と弁当を食べるようになってから、屋上でしか食べたことがない。雨の日は除く。

「相変わらずアンタの弁当って豪華よねえ」

女の子らしい小さ目の弁当箱に敷き詰められたご飯をばくつきながらアリサが呆れたような声を出す。

屋上にいくつも設置してあるベンチ。その一つに仲良く座って食事中。

「あはは。なんかいつも張り合っちゃってね。今日なんか早く目が覚めたから特に」

僕の手元には二つ弁当箱がある。二段の上下とかではない。単純に二人前。

理由は結構しょーもない。

「黒い方がアンタのだけ？ 桃子さんのは分かるけど、なんでアンタがそんなに料理できるのよ……」

「練習すれば誰でもできるって」

「できるかー！ とか叫んでるアリサは置いといて。」

お母さんと僕。実は二人で別々に作っているのだ。ちなみに黒い弁当箱が僕作。赤い弁当箱がお母さん作である。

お母さん、高町桃子はウチで経営している喫茶店『翠屋』のパティシエさん。お母さんのお菓子を求めて遠方からもお客さんが来るほどで、特にシュークリームは絶品だ。

お菓子作りが本業のお母さんだけど、店で出す軽食まで作るだけあつて料理の腕前も一流。

そんなお母さんが作ってくれるというのだから任せておけばいいのだけ。

店の準備もあるお母さんはすごく忙しいのだ。だから料理は得意な僕が自分で作ることにしたのである。

しかしそれで納得しないのがお母さん。

礼也のお弁当はお母さんが作るの！ とか言い出して。

それから何をどう間違つたのか、どっちが美味しくできるか勝負だ！ って謎の超展開になった。

そのせいで今では味はもちろん、栄養バランスに飾り付けまで凝りに凝つたトンデモ弁当ができるように。ただし二つ。カロリー計算してるの意味ないよね。まあ結構運動するからいいんだけど。

「今日はさすがにないから、ちよつとキツイかなあ」

「あ、そっか。そういえばさすがに休むのって初めて？」

「だね。あの娘、あれで意外と頑丈だし」

僕のもう一人の友達。月村すずか。

いつもは彼女とアリサに分けながら完食するのだが、今日は風邪でお休みらしい。

五時限目の体育はハードになりそうだ。

ちなみにアリサとすずかと僕で、いつも一緒に仲良しトリオ（他称）の完成である。

……というか僕の場合この二人しか友達いないし。

か、悲しくなんてないんだからね！？

『翠屋』で偶に給仕してるから通りすがりの人によく声かけても

らえるし！

お姉ちゃんの友達とはよく遊ぶし！

……あれは遊ばれてるのか。

顔はかわいいもんねえ。お母さんをそのまま子供にしたみたいな顔だし。

お母さんは美人だ。柔らかい茶色の髪は綺麗だし、十代と違っても通じかねない若々しく優しげな美貌。日本人らしからぬ青い瞳だつて大好きだ。

自慢のお母さんではあるけど、自分がその美人さんとそっくりとなると微妙な気分になる。髪を短くしたら似合わすぎて、家族全員から禁止されたし。そりゃ丸刈りのお母さんとか見たくないよね。それ以来僕の髪は首にかかる程度になっている。

お兄ちゃんくらいとまでは言わないけど、もうちょっと男前に生まれなかった。

それはともかく。

「今日の放課後は空いてる？ 暇なら一緒にお見舞いに行こうよ」
友達が少ないとその分大事にできるよねっ！ 決して負け惜しみなんかじゃない。

「もちろん行くに決まってるでしょ。私だって心配なんだから」
さすが。やっぱりアリサは優しい娘。持つべきものは友、だね。

「よし。移動手段ゲット」

「待てコラ。私の目を見てもう一度言ってみなさい」

「アリサは今日も綺麗だね！」

……恥ずかしいからって無言で殴ることないと思うんだ。

二章

月村邸。

バニングス家の使用人である鮫島さんに送ってもらって、かなり早い時間に着いた。

どこのホテルかと言いたくなるこの洋館がすずかの家なのだ。

月村家はここ海鳴市のみならず、日本全体でも有数の名家だったりする。

「あ、ノエルさん。お久しぶりです」

鮫島さんから連絡がいつていたらしく、メイド長のノエルさんが出迎えてくれた。

フルネームはノエル・E・エアリヒカイト、だったか。

見た目二十台前半のいかにもできそうなクールビューティー。

前に聞いたが、アリサの憧れの女性の一人らしい。

クールなアリサ……ないな。

お嬢さまとしているいろいろと教養は身に付けているし、そう振舞うことはできるだろうが、基本的に彼女は感情家なのである。良くも悪くも。

まあ、今はすずかだ。

「すずかは大丈夫ですか？」

「はい。午後には良くなられて、今は……………読書をなさっております」

なんだその妙な間は。元気ならいいけど。

「そうですね。良かったね、アリサ」

長い廊下を歩きながら、さっきから全然しゃべらないアリサに振ってみる。

なんかやけに大人しい。

ノエルさんが出てきたあたりから、それはもう借りてきた猫のよう。

僕の後ろに隠れてなんかそわそわしてる。

……あれか？ いきなり好きな人が前に出てきて何言えばいいか分からないっ、とか？ アリサぐらいの歳だったら憧れと好きって区別付きづらいだろうし、ありえるよね！

ちよっと思いついてノエルさんにそっとう耳打ちする。

首を傾げながらも頷いてくれた。

「アリサ様」

「ひゃい!？」

ビクウツ!! と飛び退るアリサ。なんかすごい反応。

「アリサ様は」今日も大変可愛らしいですね」

「!?!?!??」

あれ、なんか怖がつてる？ ちよっとう涙目だし。あ、あれか。幸せすぎて怖い、ってやつ。

合ってるかどうかはともかく涙目のアリサが可愛すぎる。

ノエルさんは困ってるけど、もう少しこのままにしておこう。

忍び足ですずかの部屋を目指す。何度も来たので道はバッチリだ。後ろで礼也さま!？ とか悲鳴が聞こえるけど気にしない。

馬に蹴られたくないしね！

「すずかー、いる?」

無数に並ぶ扉の一つをノックする。

バタバタ! ゴソゴソ……ドシンッ! ドタバタ……

待つこと数十秒。

「れ、礼也君こんにちはっ!」

「……そこまであからさまに隠されるとすごい気になるなあ」
顔真っ赤だし。息荒いし。

「な、何のことかなっ!？」

この娘なかつたことにする気だ……

仕方ない。僕も鬼じゃないし、またの機会にしてあげよう。忘れてはあげない。

とりあえずアリサにもしたし人物描写でもするか。

「紫色の綺麗な長い髪をした優しい女の子。目はアメジストみたいで大きくて可愛い。今は白い肌が紅潮しててちょっと色っぽい。白いカチューシャがトレードマーク。活発なアリサとは逆にお淑やかなお嬢さまで、今から大学の専攻まで考えてるすごい娘です」

「い、いきなり何言ってるの!？」

カ~~~~ッ！　とさらに顔を赤らめるわずか。なんか爆発しそう。

「いや〜今日ね、学校でお友達の紹介をしてみました！　っていうのがあったんだ。だからすかでもやってみた」

いきなりやらないでよお、ってまだ顔真っ赤。でも気は逸れたみたい。

「で、何隠したの？」

「それは……………っ！　い、言わないよっ!？」

む、残念。いけるかと思ったんだけど。

「もうっ。……………それより二人でお見舞いに来てくれたんだよね？」

アリサちゃんは？」

「ああ、アリサならノエルさんと百合空間を展開

」

「しておりませんので悪しからず」

「!?!」

どっから出てきたノエルさん。すずかが卒倒しそうになってるじゃないか。

「って、アリサはどうしたんです？」

「アリサ様ならもうすぐいらっしやいますよ」

つまり置いてきた、と。いつも完璧なメイドのノエルさんにしては珍しい。

すずかもそう思ったのかまた驚き顔になってる。

「それはともかく、礼也様。先程はよくも逃げてくださいましたね？」

……………状況把握。

要するにこのメイド様は僕に仕返しに来たわけだ。

くっ、僕は親友の恋路を応援しただけだというのに！ そりゃノエルさんがそっちの気がないのは知ってるけどさっ！
っつ、そんなこと言ってる場合じゃない。

「すずか！ お大事にね！ 僕はもう帰るから！」

「畏まりました。ではご案内いたします」

「速っ！？ って痛い痛い痛い！ 握力何キロあるの！？」

ノエルのキャラが違う、とか呟いてるすずかに恭しく一礼し、踵を返すノエルさん。

前にちよつと昔話したら急に遠慮がなくなつたんだよね、この人。それ自体はうれしいけど、とりあえず右手で拘束した僕の両手を離してくれないだろうか？ 骨が碎けそうなんだけど。

「っつて、待った！ そっち玄関じゃないって！ そっちにあるのはアナタの部屋ー！」
ばたん。

三章

今日はお父さんが監督をしている翠屋JFCの試合の日。
応援に来てただけだったけど、欠員があつたらしく急遽参加することになった。

「試合終了ー！　じゅ、12-0で翠屋JFCの勝利！」
……………どんまい。

「アンタ、相変わらず大人気ないわね」

喫茶『翠屋』のテラス席にて。

ジャージなんか持ってきてなかったから、普段着のままいつもの三人でお茶。

「いや、僕まだ子供じゃないか」

「そういう問題じゃないわよ」

六得点四アシストという華々しい活躍を見せた僕は、なぜかアリサに呆れられていた。

むー、頑張ったのに。

「だって、アリサとすずかが見てるんだから全力でやらないと」

これが、私の理由！

「そう言ってくれるのは嬉しいけどね。限度つてもんがあるでしょ」
「よ」

「そうだよお。相手チームの人たち、泣いてたよ？」

くっ、すずかまで。

「人は涙の数だけ強くなれるんだ」

「はいはい」

絶品のはずのフルーツケーキはなんだかしよっぱかった。

「今日はありがとなー！」

「おかげで助かったよ！」

打ち上げが終わり、サッカー少年たちがぞろぞろと帰りだす。看板娘（？）として見送る僕にかけられる暖かい言葉の数々。思わず胸がジーンとなった。

「やっぱ僕頑張ったよね!？」

「アリサたちとは大違いだ。さすがスポーツマン。」

一人ウンウンと頷いていると。

「そうだ。お礼にコレやるよ。ただの石だとは思っけど、キレイだろ?」

「確か今日のキーパー君だったはず。男の子に青い菱形の宝石みたいな石をもらった。」

「うん、確かに綺麗だね。」

でもなんかいやな予感がするんだけど。

「とりあえずお礼を言っただけで観察してみる。」

「ますます強くなるいやな予感。」

「僕のこれ、あんまり外れないんだよなあ。」

「……よし、埋めるか。」

「動かないで。」

家に帰り、貰った石を庭に埋めようとしてたらいきなり女の子にナイフを突き付けられた。

「……………え?」

意味が分からん。っていつかどっから現れたこの娘。ウチの流派の神速どころじゃないぞ。あれも速いけど僕なら辛うじて知覚できるレベル。この娘は瞬間移動してきたようにしか見えん。

「それをどうするつもり?」

「それ、ってどれだ。」

「この石か?」

「ジェスチャーで尋ねるとコクンと頷く。」

「改めてみるとこの娘可愛いな。」

「年齢は同じくらいで中性的な顔立ち。アリサより色が薄い金髪を」

後ろで結んで、目の色はさすがに似てる。

無地の黒いTシャツにジーパンっていう飾り気のない服装だけど、雰囲気は華があって全然野暮ったく見えない。赤い宝玉が付いたネックレスがワンポイント、なんだろうか？

ってそうじゃなかった。

「どうするって……埋める？」

「……埋めるの？」

「うん」

「……なんで？」

「……なんとなく？」

「……そう、なんだ」

なんだこの会話。

この娘、この石が欲しいのか？

それなら刃物で脅したりしないで、素直に言って欲しいんだけど。

「これ、欲しいの？ だったら」

『マスター！ やつと会えました！』

あげるよ、と続けようとした言葉は第三者の声に遮られた。

『いやあ、性別が違ったので判断に時間がかかりましたが、間違いないです！ この泥棒猫もたまには役に立ちますね』

「ちょ、酷っ！？ って違う！ 何しゃべってるのさ！？」

『うるさいです。この方こそが私のマスターですよ？ 跪きなさい』

い

「なんで!？」

これは、この娘の胸元でピカピカ光ってるネックレスから声が出てるんだろうか？

新型携帯端末？ でもこの娘も驚いてるし……

「えーと、それは？」

わたわたしてる金髪っ娘に聞いてみる。

「あ、えっと、その、これは……」

『初めまして、マスター！ 私は貴方の、貴方だけのデバイスで

す！ 名前はレイジングハート。レイハとお呼びください！』

これが僕と、僕の生涯の相棒との出会いだっただ。

四章

「ロストロギアは、この付近にあるんだね」
夜。

喧騒も遠いビルの屋上に、一人の少女が佇んでいた。
街の明かりに照らされるその装いは異様と言える。

右手に斧らしきものを持ち、長いツインテールと共に靡いているのはマント。そして腰に布を巻いているとはいえ、レオタードのよ
うな黒衣。

変態とか言っちゃいけない。

「形態は青い宝石。一般呼称はジュエルシード」

呟く少女の瞳はどこまでも澄んでいて。

それでいてどこか寂しげだった。

「気を付けて、フェイト。ニアSランクの魔導師がすでに動いて
るんだ」

少女の足元に寄り添う大きな橙色の狼が心配そうに言葉を発する。
フェイトと呼ばれた少女は微笑み、その頭をそつと撫でた。

喋る狼とコスプレ少女。二人（？）の間には確かな絆が感じられ
た。

「うん。聞いている。スクライアの天才児、ユーノ・スクライア。
正面からぶつかるとは避けないと」

でも、譲れない。

澄んだ瞳の少女は静かに闘志を燃やす。

「母さんのために」

夜の街に狼の遠吠えが響き渡った。

アリサ・バニングスは上機嫌だった。

香りのいい紅茶を口に含み、笑みを浮かべる。

頻繁にやるすずかの家でのお茶会だが、今日はちょっと特別なのだ。

アリサには二人友達がいる。一人はこの家の娘、月村すずか。もう一人は高町礼也。自称普通の子。

二人だけ？ とか言われそうだけど全然寂しくはない。二人は親友だと思ってるし、二人もきつとそう思ってくれてる。たぶん。だといいなあ……

それはともかく。

自他共に認める仲良しグループなのだけど、いくら仲が良くてもどうしても秘密というものはできてしまうものだ。中でも礼也はいっぱい秘密を隠してる。すずかも同じ考えだったから間違いないはず。

仕方がないとは思うものの、親友を自任するアリサとしてはあまり面白くないわけ。

今日はその礼也が、自分から秘密を打ち明けてくれると言ってきたのだ。

軽い調子ながらも真剣な目で告げた礼也に、すずかと二人で思わずガッツポーズしてしまった。

すずかもアリサも、女の子みたいな顔してるくせに全然弱いところを見せてくれない彼のことを結構心配してる。こっちはたくさん相談に乗ってもらってるもんだから余計に気になるし。

だからようやく自分たちを頼ってくれたような気がして嬉しかった。

さあ、何でも言うてきなさい！ いじめられてる、とかシヨタコン疑惑のあるノエルさんになんかされてる、とか実は女の子です、とか何だっついていいわよ！ いくらでも助けてあげるし、受け入れてあげるから！

「実はね」

ティーカップをソーサーに戻し、一呼吸おく礼也。関係ないけど

コイツって無駄に作法がしっかりしてるわよね。最初にお茶に招いた時なんて先生より綺麗で、こっちが焦ったくらいだ。

「僕」

ゴクリ。自分の唾を飲む音がやけにうるさい。
わくわく。

手に汗を握る。隣を見ればすずかも緊張してるのが分かる。
どきどき。

「魔法使いになったんだ」

思わず殴った私は絶対に悪くないと思う。

五章

僕は今、正座している。

下は芝生だからそんなに辛くないけど、頬と後頭部が痛い。特に後頭部。

「もう、何考えてるのさ君は！」

原因は目の前で仁王立ちしてる金髪っ娘二人。

アリサと、この間恐喝してきた娘。ユーノ・スクライアちゃん。

「魔法は秘密にするように、つて。言っただよね？」

この娘、僕がアリサたちにしゃべった途端後ろに転移してきたんだ。そのまま後頭部に痛恨の一撃。

何で殴ったし。絶対拳の痛みじゃない。そもそもなんで聞いているのさ。

「この付近にジュエルシードの反応があったからサーチしてたんだよ」

律儀に答えてくれるのはいいけど、僕の足をグリグリ踏むのはやめようか。アリサとすずかが引いている。

「君が誤魔化そうとするからだよ」

言いがかりも甚だしい。真つ当な疑問をぶつただけじゃないか。そして何で殴ったかは今分かった。僕の頬ペシペシ叩いてるナイフの柄でしょ。殺す気ですか。

「で？　なんでしゃべったのかな？」

ジュエルシード放っておいていいのかと聞きたいけど、そうしたらナイフの刃がこっち向く気がする。

「……まじめに答えるとね、こういう秘密って複数人で共有した方がやりやすいと思うんだ。もちろん信頼できる相手じゃなきゃ駄目だけどさ。その点二人なら家族並みに信頼してる。それが一つ目の理由」

ペシペシペシ……

とりあえず合格、か？　これがザクツ！　になったらゲームオーバー。なにこれこわい。

「ふ、二つ目はね、こっちのが理由としては大きいんだけど……ジュエルシードみたいな危険物が街中に散らばってるならさ、せめて友達には巻き込まれて欲しくないと思わない？」

内緒にしてたら危険性すら教えられないのだ。それで彼女たちが酷い目にあつたら悔やみきれない。

ペシペシ……ピタ。

「はあ。理由は分かったよ。でもあんまり褒められたことじゃないんだからね？」

言い足りなさそうだけどナイフを仕舞ってくれるユーノちゃん。これで納得してくれるのだからきつと優しい娘なんだろう。アリサ以上にバイオレンスだけど。

そして気持ちを切り替えたのか、先日僕にした説明を二人に繰り返す。

次元世界の概念。時空管理局の存在。ジュエルシードのような口ストロギアの危険性。魔法のあれこれ。そして今海鳴に潜んでいる危機について。

「その、ゴメン。私たちのために言ってくれたのに、殴ったりして……」

説明が終わると、やけにしおらしくアリサが謝ってきた。

素直なのはいいけど、ちょっと落ち込みすぎかな？　らしくない。

「全然気にしてないよ。友情と信頼の証を右ストレートで突き返されたことなんて、全然」

「思いつきり気にしてるじゃないのー！！」

「あはは、冗談だよ。涙目になっちゃって。可愛いなあ、もううがー！　ってなったアリサをさすが宥める。

うん。いつも通りだ。

……あ。

ホッとしたら大事なこと思い出した。

「ねえ、ユーノちゃん」

勝手に人のお茶を飲んでるのはまあ許すとして。

「なに？ あとボクのご事はユーノでいいからね」

「あ、うん。僕のご事も礼也でいいよ。それでさ」

「？」

「ジュエルシード。探さなくていいの？」

「……………あ」

目を見開いたユーノの背後で、青い光が立ち昇った。

六章

真つ先に我に帰ったのは、やはり経験豊富なユーノだった。

「封時結界！」

ユーノの足元に翠色の魔方陣が現れ、結界（多分）が周囲に広がっていく。

生き物の気配が一切なくなり、残ったのはユーノと僕。それからアリサとすずかのみ。

「……あれ？ 魔力持ち以外は弾かれるんじゃないっけ？」

「あんな至近距離で展開して下手に干渉されたほうが厄介だからボクが入れたの！ 二人は礼也が守ってよね！」

そう言いつつもこっちに防御結界っぽいのを張ってくれるユーノ。かっこよすぎる。

全員が見つめる先で青い光がようやく落ち着き。

にゃ〜お。

「………すずか、すごいね。あんな大きな猫も飼ってるんだ」

「違うよ！？」

うん、知ってる。

響き渡る鳴き声。

メキメキとへし折れる木々。

森の上から覗く、愛らしい、仔猫の顔。

「……たぶん、仔猫の大きくなりたいて願望がジュエルシールドに正しく叶えられたんだらうね」

解説するユーノも呆然としている。

確かにそんだけ大きけりゃ他の猫に餌盗られることもないよね。

月村家のエンゲル係数は跳ね上がるだらうっけど。

どしんっ、どしんっ。にゃ〜お。

猫の足音なんて初めて聞いたよ。グレイプニルの材料の一つが今ここに！……どうでもいいな。

「とりあえず、攻撃性はなさそうだからさっさと封印
落ち着いたユーノがその手に魔力を集めた瞬間。
ズドオオオン!!」

金色の魔弾が猫にぶち当たった。

「アルフ、足止めを!」

「ああ!」

弾の飛んできた方向に目を遣ると、黒衣の少女に橙色のでっかい
犬がこちらへ飛んできていた。

金色の長いツインテールが目立つ少女は猫の方へ。そして犬の方
はユーノに突っ込んでくる。

「なめないで」

それをあっさり避け、後ろ足を引つ掴んだユーノ。

そのまま振り回し、

「ちよ!?!」

「飛んでけっ」

少女の方へブン投げた。……魔法なしでも強いんだね。

しかしそれだけでは終わらないユーノちゃん。

「アルフ!?!」

大型犬より大きいその体を受け止めて体勢を崩した少女。
そこへ、

「L a s e r C a n n o n !」

翠の奔流が迸った。

「……避けられちゃったかあ。やっぱり砲撃は苦手だなあ」
魔力の残照が消える。

その先にはマントを大きく削がれながらも健在の少女たちが。犬
は気を失ってるっぽいけど。

「くっ、やっぱり桁が違う。母さん!」

少女の叫びに応じたのか。

その眼前に現れる巨大な魔方陣。

……………え？

『全く。魔力反応を捉えて起きてみればマスターはいないし、フレットもどきはマスターの見せ場を搔っ攫おうとしてるし』

ばた。とユーノが倒れる。同時に、少女を囲んでいた光弾は消失。凍った空気の中、ユーノの頭があつた辺りに浮かぶ赤い宝玉がチカチカ点滅する。

『マスター、聞いてますか？ 置いていくなんて酷いですよお。

慌てて転移してきたんですから』

それは紛れもなく、先日押しかけ相棒（？）となつたデバイスで。

「な、な、なにやってんのレイハああああ！？」

僕は間違いなく今生最大の悲鳴をあげた。

七章

陽光が気持ちよかったのか、いつの間にか寝てる仔猫（大）。
気絶してる犬とユーノ。

涙目でぼかんとしてる幼女三人。

ビュンビュンと目の前を飛び回っている赤い何か。

……どうしてくれるんだこの空気。

とりあえず赤いのは無視して一番重症っぽい謎の女の子の方へ。

腰が抜けたのか、空も飛ばずにへたり込んでるし。

「えと、大丈夫？」

「いや……！」

思いつきり怯えられた。うさぎみたいに赤い目がすごいウルウルしてる。人形めいた可愛らしい顔も相俟って、罪悪感が半端ない。こっちも泣きそうだよ。

『マスター、早くその娘やっちやいましょう！ 今ならただのサ
ンドバツクです！』

「あの怖いお姉ちゃんも寝ちゃったから。ね？ もう大丈夫だよ」
近づいたら泣かれそうなので、少し離れたところに腰を下ろして
再チャレンジ。

ついでに物騒なこと言ってるのは握りつぶす。

手の中から恍惚とした声が出るけど聞こえない。聞こえないっ
たら聞こえない。

「……いじめない？」

「うん。いじめたりなんかしないよ。ほら、あのお姉ちゃんたち
のどこ、行こ？ あのお姉ちゃんたちは優しいから」

「……うん」

よかった。なんか幼稚園児をあやしてる気分。どうも微妙に幼児
退行してるっぽい。

それはいいんだけど、頷いてはくれたものの動かない。

もじもじ。もじもじ。

「? どうかした?」

「その……あしが、うごかないの」

ああ。本気で腰が抜けてるのか。気持ちは分かる。ユーノちゃん、すごい唾つてたもんねえ。あの娘絶対DSだよ。優しいとか思ってた数分前の僕を殴つてやりたい。

警戒はだいぶ解けてるみたいなので、近くに寄って背中をさすつてあげる。

吐いてる人とかによくする行為だけど、子供にやると結構安心させる効果もあつたりするのだ。たぶんだけど。

「おぶつていくから、しっかり掴まって」

ちよつと落ち着いたところで女の子のまえにしゃがみこむ。

「……ん」

なんかすつごく素直。

すっかりとしがみついてくれたところで、そつと立ち上がる。

……軽いな、おい。ご飯食べてるのか?

気になったけど今は後回し。

椅子のところまでゆつくり運んで座らせる。

「アリサ、すずか。この子のことお願い。そばにいてあげて」

僕も付いててあげたいけど、あんまりノンビリもしてられない。だつて結界消えてるんだもん。あんなデカイ猫が見つかったら大騒ぎだ。

あれで意外と面倒見のいいアリサと、よく気の回るすずかなら大丈夫だろうし。

くいつ。

猫の方へ行こうとしたら服の裾を引っ張られた。

「どうしたの?」

うるうる。

「どっか、いくの?」

……何この子かわいい。

「あのねこさんをこっちに連れてくるんだよ。あんなところで寝たら風邪引いちゃうからね。そうだ！連れてきたらねこさん抱っこしてみる？」

「……うん！」

ヤバイ。なんか目覚めそう。

ぱあつ、と笑顔になった女の子に戦慄しつつも猫の真下に。

「レイハ、できる？」

握り締めたままだった手を開いて確認する。

『ああつ、マスターの温もりが全身に……ごほん。もちろんです、マスター』

「……じゃあ、お願いね」

とつさに放り投げたくなっただけど今は我慢。

汚物を摘まむようにして猫にくつつける。

「……なんかすごいあつけないね」

魔力光すら漏らさず、あつという間に仔猫は小さくなった。

そのそばに青い宝石、ジュエルシードが浮いている。

『封印、つと。状態がひどく安定していましたからね。暴走状態

だところはいきませんから、舐めちゃいけませんよ？』

ジュエルシードを吸い込みながら忠告するレイハ。

基本的にぶつとんでる子だけど、だいたいは僕のことを想ってくれてるからいまいち怒る気にもなれないんだよねえ。それが僕のためになるかはともかく。

「わあ、ねこさんだあ！」

まあ、今はレイハのことはいい。

とりあえずこの子が可愛すぎる。

眠ったままの仔猫を抱いて戻った僕を迎える笑顔。この笑顔のためなら死ぬる。かもしれない。

「その子、フェイトっていうんだって」

仔猫を抱きしめてはしゃいでる女の子を見ると、アリサが隣に来て教えてくれた。

ちゃんと仲良くしてくれてくれたらしい。

すずかの方はそのフェイトちゃんと一緒に仔猫を撫でている。その様子を見るに、もうすっかり打ち解けているようだ。

よきかなよきかな、っと。

二人してにやにやしている。

『ああ、フェイトがあんなに笑顔で……ありがとうございます』

『うんうん。私からも姉としてお礼を言っわ』

なんか出た。

「……今度は何？」

いい加減疲れてきたんだけど。格好からして面倒臭そうそうだし。片方は黒のタイツにボディースーツをくっ付けたような服。正直下着にしか見えん。一応白いジャケットを羽織ってるけど、サイズがぴつちりの上に一つしかボタン留めてないからほとんど隠せてない。ナースキャップじみた帽子がまた異様さを際立たせる。

薄茶色の髪をした優しそうな美人さんだけど、それだけになんかすごい残念。似合ってはいるんだけどさ。

でもこっちはまだマシなんだ。

問題はもう片方。

フェイトをそのまま幼くしたような少女。

君はなんで素っ裸なんだよ!？」

『へっ? 私たちが見えるのですか?』

見えちゃなんかまずいのか。いや、幼女の方は確かに見られちゃまずいか。

いまさら恥ずかしくなったのか手で隠してるけど、もう遅いって。その様子に苦笑しながら美人さんは少し考えるような仕草を見せ、『うーん、まずいというかですね……私たち、幽霊なんですよ』
につこり笑って言うてくれた。

………はい?

八章

ドタバタしたした一日も終わり、ようやく夜になった。

床に敷いた布団にぐてー、っと寝そべる。

普段はベッドを使ってるけど、今日はお客さんが使用中。

シンプルな白いベッドを使っているのは、遊びつかれて寝ちゃったフェイトちゃん。

もし暴れだしたら危ない、ってことで犬と一緒に連れて帰ったのだ。

アリサもすずかも引き取りたがってたけど、強引に押し切った。だって可愛いんだもん。

ちなみに犬の方はアリサに借りた猛獣用の檻に入れて庭に置いてる。

逆に誰も引き取りたがらなかったユーノちゃん。

二人ともめちゃくちゃ怖がってたので、仕方なく彼女もウチで引き取った。

フェイトちゃんのトラウマになってそうなので部屋は別だ。今はお姉ちゃんの部屋にいるはず。

……しかし、犬もユーノちゃんも結局起きなかったな。犬は分からないけど、ユーノちゃんが起きたら絶対に病院に連れて行こう。レイハが言うにはどっちも大丈夫らしいものの、さすがに心配だ。

「はふう……二人のおかげでだいたい事情はわかったけど。僕じやあどうしようもないよねえ」

思い起こすのは幽霊の二人、リニスさんとアリシアちゃんに聞いたフェイトちゃんの事情。それは二十六年前の事故から始まる。

意に沿わぬ実験による事故が招いたアリシアちゃんの死。

その事件がアリシアちゃんのお母さん、プレシア・テスタロッサを狂わせた。

優秀な科学者だったプレシアさんはアリシアちゃんの死体を保存

し、記憶転写型クローンの研究に取り掛かる。

体を壊してまで長い年月を研究に費やし、ついにはその技術を完成。

けれど、そうして生まれたクローンは、アリシアちゃんの記憶を持ちながらも全く別の存在だった。これがフェイトちゃん。

プレシアさんが壊れたのはこの時。

現代の技術では蘇生が不可能だと悟り、過去の遺失技術に頼った彼女はフェイトちゃんを魔導師として鍛え上げる。

望みのロストログアが見つかったときに、病に冒された自分の代わりとなる駒として。

その養育係として生まれたのがリニスさんだ。使い魔、という存在らしく、アリシアと一緒に死んだペットの山猫が素体になったそ
うだ。

プレシアさんのフェイトちゃんへの扱いは酷いものだったらしい。リニスさんは心を痛めつつもフェイトちゃんの教育を終え、契約通り消滅することになった。

そのとき見たのが、半ば悪霊になろうとしていたアリシアちゃんの姿。

当然の結果と言えるかもしれない。

プレシアさんの未練によって成仏することもできず、自分のためにやつれていく母の姿を見続ける日々。

それが終わったかと思えば、ようやくできた妹のような存在を虐待する、優しかったはずの母。

その光景をただ見ていただけしかできなかった。

心の均衡を崩すには十分すぎる。

慌てたりリニスさんは気合（！）で現世に留まり、アリシアちゃんの面倒を見ることにしたんだとか。

猫には九つの魂があるっていうけど、もしかしたら本当なのかもしれない。

それからは結構楽しかったらしい。

プレシアさんの枕元に立って、説教と泣き落として虐待をやめさせたり。

次第に子供らしさを取り戻していくフェイトちゃんを愛でたり。たまに街に出る二人に付いていってはウィンドウショッピングしたりタダで映画を見たり。

とにかく遊びまわったそうなの。

けれど、虐待こそなくなったものの、プレシアさんはアリシアちゃんのことを諦められなかった。

結局、プレシアさんはロストロギアを求めることに。古の都、アルハザードへの道を開くため。それがどんなに不可能に近かったとしても。

今回のジュエルシード探索はそうして始まったらしい。始まった途端に終わったけど。

なんとかしてあげたい。切にそう思った。

たぶんだけど、アリシアちゃんトリニスさんはもう自然には成仏できないんじゃないだろうか？

彼女たちの顔を見てるとそんな考えが浮かんできてしまう。

長く現世に留まりすぎたせいかな、その行動のせいかな、はたまたなんらかの魔法的要因によるものかな。

おそらく彼女らの魂は変質してしまっている。幽霊なんて見たことのない僕が知覚できるのがその証拠。

オカルトなんて完全に専門外。だから僕の推測は的外れなのかもしれない。

でも、もしこれが正しかったら。

死ねばそれで終わり？ それがこの世の真理？

そんな理なんてクソくらえだ。

その例外を僕自身が体験している。

一度死んだ僕が、こうしてここにいる。

だから、諦められない。そういうものだ、なんて割り切れない。

安っぽい同情や、くだらない偽善かも知れない。

別にそれでもいい。

とにかく彼女たちを救いたい。

だけど……それなのにつ！

この世界よりずっと進んだ技術がある世界に生きた僕の知識が、
経験が。

死者蘇生なんて不可能だと声高に告げてくる。

僕のはあくまでもイレギュラー。参考にすらならない。プロセス
がわからないし、そもそも幽霊になったこともないのだから。

「こんなに自分の無力を呪ったのは久しぶりだよ……っ！」

フェイトちゃんの寝顔を眺める二人は幸せそう。それが余計に
悲しい。この二人はきつと諦めきってる。死を受け入れている。じゃ
なきゃ、こんな綺麗な顔するもんか。

僕の感情を察したのか、アリシアちゃんがくすつ、と笑う。

『基本的にさ。生き物の体って、触ろうとすると弾かれるんだよ
ねー。例外は自分の体』

でも。

言い聞かせるように。腹が立つくらい透き通った笑顔で。

『弾かれはしない。けどそれだけ。何度やっても素通り。ああ、
これが死んだってことなんだなー、って妙に納得しちゃった』

もう死んでるんだよ、と。だから気にしないで、と。

悲しみの欠片すら見せず、達観したように話すアリシアちゃんが
なんだか遠く見えて。

僕は少し泣いた。

『ふむ……マスター』

珍しく黙り込んでいたレイハが口を開いたのはその時だった。

二人を知覚できない彼女のために念話で話を伝えてからは一言も
喋っていないのだけ。

『二人を救いたいですか？』

いつもと違う真面目な口調に迷わず頷く。

「……………レイハ、なにか方法があるの？」

その言い方だと、まるで……………

わずかに期待を抱いて尋ねると。

『もちろんです』

返ってきたのは自信に満ち溢れた声。

『私はマスターのデバイスですよ？ マスターの願いに応えることが私の役目です』

八章（後書き）

この辺はリニスを出したくて出来た、ちよっぴり暗めのお話。無理矢理なところが目立つけど適当に流してください（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7479y/>

僕、生きて帰ったら翠屋を継ぐんだ.....

2011年11月24日01時52分発行